短編集

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Ｎコード】

Ｎ４８４８ＢＡ

【作者名】

蒼月

【あらすじ】

今までの短編をひとつに纏めました。

Break Down

誰も居ない後宮で打ち捨てられたような２０代と思しき黒髪の女性は自分の胸元をきつく掴みながらギリッと歯を喰いしばり、過去に思いを馳せる。

『――未来永劫、捧げる愛はひとつだけ。だからゆっくりと傷を治せ。』

胸元に出来た大きな傷にそっと口付けながらあの人がそう誓ったのは遥かな昔。私は何の疑いも無くあの人がやって来る日を指折り数えながら部屋の中で待っていた。でも、いくら待ってもあの人は来なかった。初めは信じてた。ただひたすらあの人が来ることを。

政事を抱えて大変なのかも、とか。傷が完治するまで来るのを控えてるのかも、とか。でもそのうちおかしいと思ったのよ。だってよく見知った顔の侍女たちがひとり、ふたりと消えて行き、変わりにやって来たのが初めて見る顔ぶればかり。しかもその人たちの私への態度。まるで空気のような扱い。居ても居なくても構わない。そんな態度で仕事をこなす侍女たち。いや寧ろ居なければ良いと言う思いが雰囲気や視線などで十分な程に感じ取れた。それもそのはずよね。だって――・・・

過去の残滓から意識が浮上し歪ませ口元からクスクスと自嘲じみ

た笑いが毀れる。毀れたその嘲りの声は宵闇の中に吸い込まれ跡形もなく消えて行く。そして代わりに王宮の方角から微かに聞こえるのは盛大な演奏と耳を打つ歓声。そして祝砲。

まるで蛾が明かりに惹きつけられるようにフラフラと揺れる身体で一歩、また一歩とバルコニーへと近づくと瞳を眇めて遠くに見える光の洪水を見る。その光の洪水の正体はこの王国の国王の結婚式。そう、あの人の結婚式。私を煙たがる侍女たちが嬉々として教えてくれたわ。なんでも、命を懸けてこの世界を闇の主から守ったと言われる隣国の王女を王妃に迎える素晴らしい日。だとか。その話しを聞いた時、目の前が暗くなり胸が押し潰される程の痛みと絶望を感じたわ。だってこの世界を救う為に異世界から呼ばれ、あなたと生きる為にこの世界に留まり、あなたを守る為にこの命を投げ出し、あなたの為に醜い傷を負った。のに、あなたは私じゃない別の女性を王妃に迎えると――しかも私と瓜二つの女性。

あなたにとって私は一体何だったのかしら。異世界から来た隣国の王女にそっくりな都合の良い（おんな）？　ああ、きっとそうね。でなければこんな用意周到に事が運べるわけがないもの。私はなんて愚かだったんでしょう。あなたはそんな私を皆と一緒になって笑ってたのかしら？　何も知らない愚かな女――と。でも、それも今日まで。もうじき日付が変わる。日付が変わるように私の中にあった感情も・・そうそう、あなたは知ってたかしら？　愛と憎しみは表裏一体。どんな事で入れかわるか分からない。まるで1枚のコインのようだと言う事を。

女性がバルコニーに身を預ける形で寄りかかりながら遥か遠くを

見つめていると目と耳が凄まじい衝撃音と、それに付加する形で王宮を襲う衝撃波を捉えた。衝撃波は打撃となり建物などに損傷を与え、目も眩むほどの赤い閃光が王宮を包み込む。その後、魔獣たちの咆哮と肉の焼ける臭い。そして助けを求める無数の声が響き渡った。

ああきっと今頃は王宮内は血の海に変わっていることでしょうね。そして救世主と言う名の隣国の王女に助けを求めて群がる人々の光景が瞼に浮かぶわ。ふふ・・力も何も無い唯の女に縋り付く彼らは一体いつ気付くのかしら？　その女が私ではない事に。そしてそれに気付いた時、彼らはどんな態度に出るのか。そんなさまを思い浮かべて女性はくつりと笑みを零す。

「――満足か？」

一人きりしか居なかった空間に突然響いた艶を帯びた声――。その声のした方に視線を向ける。その場に現れた人物を目に捉え微笑を向ける。酷く艶やかな笑み。だが、その瞳に宿るは紛れもない狂気。

「お前はこれで満足か？」

再び問う声にゆっくりとした口調で、しかしはっきりと救世主は答える。

「いいえ、まだよ。まだ足りないわ。私を貶めた王に、王女に、この国の人間に。」

歪んだ笑みを浮かべながら酷く楽しげに言葉を続ける。

「この世界を滅ぼさない限り、私が満足することなんてないわ。」

「そうか、なら我は思う存分やらせてもらおう。」

「ええ、思う存分やってちょうだい。こんな世界に未練は無いもの。それに、あなたを封じるつもりももうないから。」

そう、こんな世界など、こんな国など、救世主（わたし）を裏切った王など・・・

「総て滅ぼしてしまえばいいわ。闇の主！」

落ちる、堕ちる、墜ちて行く――――。

全てに裏切られた救世主は守るはずだった国を、

守るべきだった人々を、

守らなければいけなかった世界を――――

？Ｉ ｗａｎｔ ａ ｔｈｅ ｂｒｅａｋｄｏｗｎ ｏｆ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ？

を望んだ救世主・・・・

世界の崩壊

妻問い

「――リリアナ・コンシェール。私の妻になっては貰えぬだろうか？」

あたしこと、リリアナ・コンシェールという娘はどこからどう見ても平凡な容姿のこれまた平凡な街娘。そのあたしの前に片膝を付き妻問いするこの見目麗しい白銀色（プラチナブロンド）の瞳を不安げに燻らせ、上目遣いで見てくる男性はアシュレイ・ブルランカ・リヒタール侯爵。このアリアロス大陸の四大侯爵の内が一人。

「あの、アシュレイ様。それは・・」

――普通、多少なりとも付き合いをしてから聞くことなんじゃないんですか？

「確かに、一般的にはそうなのかも知れません。」

「いや、一般的にではなく、普通はそうなんです。こんな気が付くと式場に連れてこられ、あれよあれよと言う間に祭壇に導かれ（あたし的には押しやられ）しかも周りを騎士団なんかで逃げ道を無くす程囲いもしません。てかなんであたしの心の声に答えれるんですかッ？！」

「貴女を愛しているからですよ。それに他の男になど奪われたくないのでこんな強攻になってしまっただけです。」

「なっただけって・・・アシュレイ様。その言葉はどうか貴族のお嬢様方にお願いします。」

思わずがっくりと項垂れるあたしをなにか期待を込めた眼差しで見つめるアシュレイ様。すみませんアシュレイ様『・・・まぁなんてロマンティック』なんてこれっぽっちもあたしは思いません。へンな期待などしないで下さい。てか、そこの神父様。お願いですからこれ以上式を進めないでください。ホントに逃げ道なくなります。いや、そんな困ったように顔をクシャリと歪ませられてもほんと困ります。そもそもあたしがそんな顔したいくらいですってば。それとアシュレイ様、強制的にあたしの指に指輪を嵌めるのはやめて下さい。

「あぁやっぱり、リリアナの細い指にはこの指輪が良く似合う。ふふ、綺麗ですよ。さぁ私にの指にも同じように・・・」

あの、アシュレイ様？　器用にあたしの指で指輪を掴んでどうするんですか？　しかも自分の指に指輪を嵌めさせようなんて、そんなの無理にきま・・あぁ、出来ちゃいましたね・・・

「ふふ、お揃いですね。」

「お揃いですね。ってアシュレイ様。結婚指輪（マリッジリング）なんでおんなじなのは当たり前です。てか神父様、だから進めないでって――」

「――いま、この時をもってこの両名を夫婦とする。」

あぁーー・・宣言してしまいましたね。神父様。どうして宣言しちゃうんですか。え？　アシュレイ様の無言の圧力が怖い？　そんなの知ったことですか。それよりどうしてくれるんですか。あたし

から離縁なんて出来ないんですよ？　あ、でも白い結婚なら白紙に戻せ・・・

「リリアナ、式の後はお披露目ですが、その前に寝室を案内してあげましょうね。」

詰んだ・・。詰んじゃいましたよ神父様。まったく白い結婚なら白紙（なかったこと）に出来たのに・・・どうしてくれんですか神父様。

「あぁそれからリリアナ。先ほどの私の問いには答えて貰えるだろうか？」

「・・・答えるも何もアシュレイ様。強制的に結婚させられたのに、いまさら妻問いなんて何の意味があるんです。」

「意味なら大いにありますよ？　貴女の口から『私の妻になる』と言う言葉が聞けるのですからね。」

目の前で蕩けるような甘い笑みを浮かべているのに、なんであたしの背筋が薄ら寒くなるんでしょう。

「さぁ聞かせて下さいリリアナ。貴女のその愛らしい唇から『私の妻になる』と言う言葉を。それ以外はたとえその愛らしい唇から発せられた言葉だとしても聞きません。」

「わかりましたアシュレイ様。その妻問いの返事はこの結婚が白紙に戻ってからと言う事で――」

「却下です。」

すべてを言い終わる前に却下されました。

「アシュレイ様、ホントに聞きたいこと以外は聞かないんですね・・・。て言うかこのやり取り既に5回目なんですけど。いい加減やめませんか？」

「リリアナが望む答えをくれたなら直ぐにでも。」

――永遠に終わらないような気が・・・・

遠い目をして佇むリリアナを神父はもちろん、周りを囲む騎士団らも哀れんだ目で見つめるだけであった。

妻問い　ＳＩＤＥ　？Ａ？

彼女を初めて見かけたのはうららかな春の午後だった。知り合いの屋敷からの帰り道、馬車からふと覗いた先に彼女が居た。肩にかかるくらいの栗色の髪を風に躍らせ、ヘーゼルナッツのような榛色の瞳を楽しそうに煌めかせる小柄な少女は、往来の真ん中で友らしき少女に言い寄る大男を――・・・

足蹴にしていた。

いや、正確には回し蹴りで蹴り飛ばした後、ふらついて倒れた大男の背中をまるで階段でも上るかのように片足で踏みしめているのだ。そう、まるでどこぞの国の女王が如く凛々しいその姿に今まで感じたことも無い程の衝撃を受けた。

「――何かありましたか？　旦那さま。」

しばし呆然としていた私に従僕であるリニアスが声をかけ、尚且つその視線の先を辿る。視線の先には大男を足蹴にしている少女。従僕は視線の先に居るその少女の姿を認めると苦笑しながらボソッと言葉を口にしたのだ。『あぁ、またやってる。』と。

その声で我に返った私は『彼女を知っているか？』とひどく擦れた声でリニアスに聞いていた。そしてその問いに不思議そうな顔を

したリニアスがそれでも望む答えをくれた。

彼女の名前はリリアナ・コンシェール、今年１８才になるそうだ。――見た目が見た目だけに年齢を聞いた時は思わず聞き直したが間違いなく１８才になるそうだ。１８才・・・恋人の一人や二人居てもおかしくはない年齢だが現在はそれらしい人物は居ないとの事。そして両親は幼いころに死亡し、今はなき両親が残した小さいながらも店舗兼家で細々と暮らしていると言う事と。そして彼女の一日の生活も調べで分かった。それはもう朝は日も暗いうちから夜は彼女の家の明かりが消えたのを軽く3時間ほどその場で確かめ、尚且つ近隣住人に聞き込み彼女に懸想を抱くもの居れば呼び出し、丁重に話し合った。

そして屋敷の自室で一人、あれよこれよと考え遍くことはこれからの事。なにせ我が家の家訓は『思いたったら吉日』・・ではないが、まぁ何にしても、私もしっかりと父上の血を引いていることに苦笑を漏し、尚且つ、一人ほくそ笑む。彼女をどう囲い込もうか、と。

Time Over

ある晴れた昼下がり。比較的大きな公園の噴水を背に、一人の少女が佇んでいた。

「・・ん？　もう心配性だねぇマチは。大丈夫だよ何度も念を押したし、約束だってしたんだから。」

『まったく・・・それで何回ドタキャンされてるのよ愛華。いいかげん学習しなさい！』

「うんうん、わかったわかった。今度されたら学習するから、ね？」

――大丈夫、大丈夫。きっと来てくれるよ。だってここは初めてのデートで待ち合わせた場所なんだもん。

□□□□□□□□

ねぇ、なんで？　お願いしたよね・・・？　わかったって言ってくれたよね？　なのになんで・・なんでそんな子と手を繋いでるの？　なんで、キス・・・してるの・・？　待ち合わせから3時間後。やっと来てくれたと思ったら・・・そしてこれ見よがしのその姿に込み上げて来るのものは・・・・

「――ねぇ、今日彼女とデートだったんじゃないの？」

「あ？　お前が気にすることねぇよ。それより今日は何処行く？」

「ホントに良いの？　彼女こっち見てるけど。」

「いいからいいから、あいつのことはほっとけ。」

隣に立つ少女に優しく微笑みかける自分の彼氏。そして彼女である自分に向けられるものは身も心も切り裂かれるられる程の冷たい視線。その視線に耐え切れず俯く私を他所にだんだん遠ざかって行くあなたの気配・・・。

「・・くっ・・・ふ・・は・・ほ・・本当に・・あなたは・・・」

あれからどれ位経っただろうか。自分の胸元をギュッと鷲掴みながら言葉にならない言葉が乱れた呼吸とともに口から零れ落ちる。

□□□□□□□

あれが？最後の外出？だったのに。皆に無理を承知でお願いして・・・やっと許可を貰って。いっぱいいっぱい楽しんで、心に楽しい思い出を沢山々残すはずだったのに、なのにあなたが・・・あなたがくれたのは最後の最後まで深い悲しみと絶望だけ。

「――カンフルと、カテーテルの用意をッ！」

「――先生ッ！　血圧が６０を切りましたッ！！」

「？！　すぐに電極を――！」

「――――ッ！？」

「――ッ！」

Ｔｉｍｅ・・・・Ｏｖｅｒ・・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4848ba/

短編集

2012年1月13日13時02分発行